

# AMCoR

Asahikawa Medical College Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

旭川医科大学研究フォーラム (2000) 創刊号:101.

学会の動向 第16回日本皮膚悪性腫瘍学会の報告と今後の展望

橋本喜夫

## 学界の動向

# 第16回日本皮膚悪性腫瘍学会の報告と今後の展望

橋本喜夫\*

平成12年6月30日、7月1日の2日間にわたって、第16回日本皮膚悪性腫瘍学会が、旭川医大皮膚科学教室の主宰（飯塚 一会長）で、旭川グランドホテルにおいて開催されました。本学会は、皮膚科としては最重要疾患ともいえる悪性黒色腫（メラノーマ）をはじめとした有棘細胞癌、付属器癌などの固形癌や、菌状息肉症などの悪性リンパ腫を含めた皮膚腫瘍全般の、基礎研究、病理、病態、治療法などが討論される会員数1,200名の学会です。参加者は主に、皮膚科医、形成外科医ですが、時に病理医などの参加もみられます。私もこの学会に1994年から参加していますが、ともすれば「おとなしい」と他科の先生からいわれがちな皮膚科学会としては、メスを握る先生が多いせいか？、毎年ホットな論争が展開される学会です。当教室としては開講24年目にしてはじめて主催する全国規模の学会ということになります。1年前から、準備はしていましたが、学会が近づくにつれて、よけいな心配事がつるものだとはじめて知りました。

さて2日間の内容を簡単に要約しますと、まず、飯塚 一の会長講演では、「旭川医大皮膚科学教室のメラノーマ治療の現況」と題して、前期10年に比べ、後期10年のメラノーマ生存率が確実に向上したことを明確に示し、馴れた医者が馴れた疾患を扱うことの重要性をAIDSのデータをふまえて推察しました。次に招請講演Ⅰでは国立がんセンターの田矢洋一先生が「細胞癌化の基本経路：RB 経路とp 53経路」という題で、癌基礎研究の最先端の講演をなされました。p 53の特定領域のリン酸化が p 53のアポトーシス誘導能を制御しており、これが今後の癌治療のターゲットになりうるという話を、最近 Nature に受理された最新のデータをまじえてホットに語っていました。招請講演Ⅱでは慶應義塾大学先端医科学研究所の河上 裕先生が「T(ティー)細胞認識メラノーマ抗原の単離と抗原特異免疫療法」の講演をなされました。まだまだ改

良の余地はあるものの、メラノーマ末期患者にとっては期待できる夢のある話でした。その他、シンポジウムでは「悪性黒色腫の診断と治療の新展開」と題して、6人のシンポジストとオーガナイザーの信州大学の斎田俊明先生、国立がんセンターの山本明史先生の協力で実りある討論が長時間にわたりなされました。特に早期診断においては、色素性皮膚病変に鉱物油やエコーゼリーを滴下して、デルマトスコープやビデオマイクロスコープを用いて、拡大像を観察するdermoscopyは当科でもいち早く導入しており、興味深い内容でした。肉眼では観察できない多彩な色素沈着パターンを明瞭に観察でき、メラノーマの早期診断としてまた無侵襲な臨床診断法として、きわめて有用と思います。また皮膚科においてもパワードプラ法による超音波診断が注目されており、特にメラノーマの病巣及び転移と思われるリンパ節の血流信号を検出し、そのパターンで術前診断が可能になります。当科においても、この超音波診断装置の導入がきまり、有益な術前情報が得られると思われまます。また厚生省班会議をはじめメラノーマの領域で今最もホットな sentinel lymph node (SLN) (歩哨リンパ節) 生検の有用性、手技について当科の和田が発表したことは名誉なことでした。この歩哨リンパ節の概念は、メラノーマ原発巣からのリンパ節転移はその部位からのリンパが最初に流入する歩哨リンパ節にまず生じ、他のリンパ節へはこのSLNから広がってゆくという考え方です。パテントブルーなどの色素や、Tc 99m 標識コロイドなどを原発巣皮内に局注すると、所属リンパ節のSLNにまず検出されます。このSLNを摘出して、組織学的に観察し、ここに転移が認められれば郭清術を施行し、そうでなければ郭清せずに、経過観察するのです。このSLN biopsy は本邦でも数施設で試行されており、当科でも厚生省班会議の一員として、現在鋭意症例集積中でありまます。やはりこの部門の質問が一番多く、他

\* 旭川医科大学 皮膚科学講座

大学の先生の関心の高さがうかがえました。そのほか、メラノーマの進行期治療としては、欧米の Dartmouth regimen に対応する本邦における Dac-Tam 療法 (DTIC, ACNU, CDDP にタモキシフェン併用) が話題になっています。これは当科でもいち早く開始しており、班会議共同試験では6か月以内に化学療法を行っていない症例に限ると、46%という高い奏効率を得ています。その他、進行期メラノーマに対しては、抗原ペプチドを用いた免疫療法や、 $\beta$ 型インターフェロン遺伝子を用いたメラノーマに対する遺伝子治療など、夢のある数々の仕事が討論されました。

さて特別講演は国立がんセンター名誉院長、早期胃癌検診協会理事長の市川平三郎先生に「胃X線診断の発展と形態学をめぐって」という講演を頂きました。先生は日本人初のレントゲン賞受賞者で数々の栄誉をもつ先生ですが、そのユーモアをまじえたすばらしいお話は拝聴した学会員は全員感激したものと確信します。「本物の話」を聞かせて頂いたという満足感がありました。私は講演後、先生の著書に直筆のサインを頂いて家宝にしています。

ランチオン講演は虎の門病院皮膚科の大原國章先生が「臨床写真の撮り方」と題して、主として若い先生方に教育用の講演をなさいました。臨床写真は特に皮膚科(形成外科医も)にとっては、日常最も重要で、かつ機会の多い作業であります。豊富な臨床例をもとにレベルの高い臨床写真の撮り方をわかりやすくご教示いただきました。

1日目の学会終了後の懇親会では500人以上の参加者があり、旭川の料理に皆様満足されたようでしたし、アトラクションの「よさこいソーラン」もはじめて見たという先生が多く、好評を得ました。

そのほか、148題の一般演題は2日間にわたりA-C会場に分かれて、熱心に討論がなされました。

一般演題の中で、目だったものをあげると、基礎研究では、血管肉腫細胞とVEGFとの関連、特に血管肉腫細胞ではVEGFがautocrine的に発現していることが報告され、さらにp53のpoint mutationによりVEGF分泌が増強されることが示されました。このVEGFは血管肉腫患者の血清中にも測定され、将来これが、病勢のマーカーにもなりうるデータが示されています。治療に関しては、LASERによる日光角化症のskin resurfacingの有用性や、皮膚欠損創に対する人工真皮の有用性などが印象的でした。検査法に関し

ては、前述した歩哨リンパ節とも関連するのですが、lymphoscintigraphyがリンパ節郭清の範囲をきめる有力な手段になりうることを示した報告が幾つかの施設でなされました。全体を通して、有意義な学会であったと自賛していますが、一部プログラムがタイトすぎて、十分な討論の時間をとれなかったのは反省すべき点と思います。

天候は2日間ともおおむね晴れで、開催者としては幸運でした。学会終了後のサテライト企画である「皮膚がんの早期診断と治療」というタイトルの市民公開講座は、会場が広すぎるのではと担当者からいわれ心配していましたが、300人以上の市民が講演を聴きにきてくれて、熱心な討論、質問をなさいました。特に講演して頂いた元国立がんセンター皮膚科医長の石原和之先生と、当科飯塚教授は市民にわかりやすく話をして頂き、少し答えづらい質問も優しく回答していただいて、主催者として涙が出るほど嬉しい気持ちでした。

さて本学会(日本皮膚悪性腫瘍学会)の今後の展望であります。まず大会運営に関してですが、今回の理事会、評議会で従来からあった皮膚リンパ腫研究学会(平成12年に第19回が行われた)が平成14年度から本学会に統合されることが決まりました。学会の細分化、多すぎる学会などが問題になっていますが、両学会の理事長(斎田俊明先生、瀧川雅浩先生)の英断と思われ。両学会には若干の運営方法の違いはありますが、今後2年間に調節してゆくものと思われ。この合併により、単純に計算しても本学会はさらに演題数にして50以上、参加者も増加することとなり、益々隆盛すると思われ。本来、悪性腫瘍はその科でも最重要疾患であり、皮膚科医がメスを離すことの危惧、specialityの喪失の危惧も叫ばれて久しいのですが、皮膚悪性腫瘍を皮膚科で治療診断してゆくことの重要性(当たり前のことですが)を再確認する意味でも、皮膚科の専門性を維持する意味でも、何よりも皮膚癌におかされた多くの患者さんのためにも本学会の担うものは重大と思われ。

さて学問的には、今後メラノーマに関しては進行期の治療に目をむけられると思います。欧米ではCDDPを主体としてIL-2とIFN- $\alpha$ を併用するsequential biochemotherapyが注目されています。50-60%という高い奏効率と10%程度の長期生存例が報告されており、今後これらの治療の再検討も本学会の使命となり

ます。またDTICの活性型で経口可能なtemozolomideの開発も進んでおり、近い将来使用可能になると推定されます。

メラノーマに限らず、遺伝子治療、免疫遺伝子治療、抗転移薬などの開発も今後期待されます。また地

球環境悪化に続くオゾン層の破壊により、紫外線関連の皮膚癌の増加も北半球を中心に問題になっています。今後は、紫外線発癌の基礎的研究の進歩と従来は比較的軽んじられていた予防医学の発展も本学会が扱わねばならない課題と思います。

## 学界の動向

### 第2回日本母性看護学会・学術集会の内容と将来への展望

野村 紀子\*

平成12年6月24日は、晴天の暑い一日であった。

大雪クリスタルホールの音楽堂を会場として開催されたが、全国から100余名の参加があった。残念ながら、前日まで鹿児島市において国立助産婦教育会議が開催され、日程を調整して駆けつける会員も多く、国立大学に勤務する諸先生方には、多大なご迷惑をおかけすることになってしまった。また、日程的に不参加を余儀なくされた方には本当に申し訳なかったと思う。発表演題は、母性看護学の狭い領域の中ではあるものの、それぞれの専門性を生かした、また高度な内容であったと考えている。発表抄録の査読は、本学会の事務局である三重県立看護大学ですませ、採用された演題は11題であった。

例えば、「母児異室希望妊婦が、自己決定による母児同室を実施するまでのプロセス」：金沢大。多くの施設が、管理上の問題あるいは母親本人の希望を取り入れるなどの選択で、出産直後の新生児の管理を、母児同室制あるいは異室制などと区別している。この演題は最初は母親本人が母児異室制を希望しながら母児同室制へと考えを変えた48例を対象に、面接調査し分析したものである。一般に、臨床では母親の申し出をそのまま認めたり、あるいは施設側の理由から、その本人の意志を確認しながらそうした判断をしたりすることは、極めて少ないと言える。その意味において、貴重な分析を行っていると考えられる。選択のプロセスには、児に対する愛着の芽生えがあり、母親として

の自覚が見られる。そのことが母親の母乳哺育意欲の高まりとなり、家族とのふれあいを求めていく経緯から母児同室制を希望するに至る、というのが結論であった。

「母親の育児支援に関する基礎的研究」：福井医大。この発表は、仕事を持つ育児期にある母親1101例を対象として、具体的な育児支援のあり方を、自記式質問紙調査を留置法にて実施し、分析検討したものである。有職女性は育児と仕事の両立に対してアンビバレントな感情を持っており、その育児支援には夫や家族のサポートシステムが必要であって、母親の心身の健康に対する支援が重要である、という結論を得ている。

「月経痛に対する使い捨てカイロによる三陰交温熱刺激の有効性について」：埼玉医大。この発表では、生理的現象として存在する生理痛を緩和するために、43例を対象にしてVisual Analog Scaleと McGill Pain Questionnaireの疼痛評価を行い、具体的に使い捨てカイロの効用を見出している。すなわち、両下肢三陰交にカイロを貼用することが、月経痛の疼痛緩和に適切であったという。これらの結果は、看護の実践活動に直ちに使用できるものであった。また、時代を反映した「岩手県に在住する更年期女性の特性」：岩手大、「不妊女性への看護介入方法の検討」：東大付属病院などもあった。更年期女性、不妊症といったキーワードは、現在の社会でいろいろな意味で関心を持たれ

\* 旭川医科大学 臨床看護学講座